

〔学部共同研究会報告〕

先住民と日系カナダ人

田中 裕介*

本稿は、2009年1月12日に日系ボイス編集長の田中裕介氏を迎えて開催された学部共同研究会の報告概要である。

2007年、「先住民に関する権利に関する国連宣言」が議決された。この国連宣言では、先住民固有の文化を享受する権利はもとより、土地所有権保護についても謳われていた。ついで、2008年洞爺湖サミット開催を前にして、日本では、「アイヌが先住民であること」が国会決議された。すでに、1995年に先住民に対して、自治権を付与したカナダにおいても、多くの問題に直面しており、こうした国連の動きに対して、積極姿勢を見せられないでいる。こうしたカナダと、きわめて、対照的な日本の光景であったが、はたして日本社会において、先住民問題はしっかりと真正面から受け止められているのであろうか。こうした問題意識から本学部共同研究会は開催された。

カナダにおいて、多くの日系新聞が廃刊に追い込まれるなかで、現在に至るまで発刊を続けている『日系ボイス』は、北米における日系人社会の歴史を見るうえで、第一級資料となっている。学部共同研究会では、『日系ボイス（日本語名：日系の声）』の編集に20年あまり携わってこられた田中裕介氏をお迎えし、日本とカナダという2つの国に関わりながら、『日系ボイス』の編集に当たられてきた個人史を振り返りながら、複眼的な視点から先住民問題についてご報告いただいた。氏の編集活動に絡んだ個人史それ自体も、日系社会の在り様を理解するうえで貴重な資料と言えるだろう。

田中氏自身は、北海道出身であり、幼少時に、当然、アイヌ問題に遭遇している。本報告概要では、そうした田中氏が、カナダ生活において、自身がエスニック・マイノリティーとして差別されるなかで、ジャーナリストとしての問題意識を研ぎ澄まし、貴重な体験を重ねられて行ったことが銜い無く語られている。そこから、われわれは、日本が直面する多文化共生問題に関してきわめて多くを学ぶことができるだろう。

(研究会コーディネータ 小澤 亘**)

はじめに

私は、カナダにおける日系メディアの1つである『日系ボイス』の編集に、20年間、携わってきました。今回、なぜ、先住民問題を取り上げようと思ったか、それは、『日系ボイス』2008年12月・2009年1月合併号で、デイビッド・スズキ氏のコラムを翻訳紹介したことがきっかけとなっています。

*日系ボイス・マネージング・エディター

**立命館大学産業社会学部教授

デイビッド・スズキ氏は、カナダを代表する遺伝子学者であり、かつ、環境保護主義者です。彼のコラムを毎号和訳して掲載しているのですが、そのコラムのタイトルは、「経済危機と先住民ルビコン」でした。カナダにおいても、昨年（2008年）秋から経済的に大きく落ち込んでいます。これまで10年間、カナダは未曾有の経済発展を遂げてきました。アルバータ州が石油で一番潤ったわけで、州民は、税金の還付金、無料の公共施設など豊かな生活を享受してきました。ところが、いま、急激な経済的落ち込みに直面しています。

そこで、再び顕在化してきたのが、先住民問題なのです。ルビコン族が住んでいる一帯の地下には油田が眠っているからです。油田から採った石油やガスを運ぶためのパイプライン造営に向けて道路がつくられる。そして続いて、パイプラインが敷設されると、そこを生息領域としている動物たちに多大な悪影響を及ぼします。当然、ルビコン族は伝統的な狩猟生活が維持しえなくなります。ルビコン族にとっては死活問題で、パイプライン設置に対してずっと反対運動を続けてきました。先祖代々、所有してきた自分たちの土地であるとして、カナダ政府を相手取って訴訟も起こしてきました。こうした動きに対して、政府がいくばくかの補償政策を取ってきたことは確かです。石油ブームの時は、先住民たちも石油関連の職に就き、恩恵を得ていました。しかし、この経済不況でそうしたメリットが薄れると、従来からの問題が再び顕在化してくるのです。

デイビッド・スズキ氏の問題提起を受けて、私は、ルビコン族とその支援者が激しく闘ってきた森林伐採反対運動を、この10年間、すっかり忘れていたことに、はたと気がつきました。そこで、改めて過去の記事を洗い直して、先住民問題と日系カナダ人との関わりを振り返ってみるべきであろうと考えたわけです。

マイノリティ問題との出会い

ところで、私は北海道出身ですが、だからと言って、先住民問題を語るのに良い立場にあるとは思っていません。アイヌの側からみれば、侵略してきた和人の三代目だからです。小学校の時、クラスに少なくとも2人くらいのアイヌの子どもがいました。もちろん、アイヌだとはいっさい誰も言わない。ただし見かけでは分かります。また、非常に貧しく、学校も休みがちでした。1962年もしくは63年のことです。1クラス63人の時代でしたが、そんななかに、転入して来たアイヌの男の子がいました。彼はしばしば学校を休んでおりました。先生が、「なんで学校に来ないのだ」とホームルームの時に叱責したことがありますが、その子は泣きじゃくりながら、「おじさんのところに行っている」と答えました。電車に乗って、札幌の中心街の狸小路にある親類のアイヌ工芸みやげ物店に行ってきたと言うのです。私はなぜか毛深くて、小学6年で大人のような体つき（身長163センチ、体重65キロ）でしたので、彼はことあるごとに、私に庇護を求めるように近寄ってきました。いじめられないための便利な用心棒的存在だったのかもしれない。

さて、それ以前の幼少時の記憶のうちに、差別する側に立つという、じつに苦い体験があります。それは、余市の川原で、石をぶつけてアイヌの子をいじめたという、今となっては思い出すのもつ

らい経験です。私の従兄とその友達たちが寄って集って、アイヌの子をいじめていたのですが、たまたま、余市の従兄の家に遊びに行っていた私は、何もわからないまま、そうした悪ガキに混じって、よく泣くみすぼらしいなりアイヌの男の子に対して、ちょっかいを出し、石をぶつけて、面白がりました。こうした出来事が、ずっと記憶の底にありました。

その経験をしみじみと思い出されたのは、カナダでの出来事でした。私は、白人のカナダ人女性と東京で結婚して、子どもをもうけた後、1986年にトロントに移住しました。35歳の時です。ところが、引っ越した途端に、家に雪つぶてが飛んできたのです。子どもたちの仕業でしたが、彼らにとって、何が気に入らないのかというと、白人とアジア人が結婚した家族だからということらしいのです。トロント市の東部にあたるその地域では、スコットランド系の労働者が元来たくさん住んでいたところであり、非常に保守的な地域でした。

後に分かったことですが、この地域を中心とするネオ・ナチズム、あるいは、白人至上主義者（White Supremacist）のグループがあったのです。現在でもあるでしょう。当然、子どもたちは親から差別的な姿勢を学んでいる。そんな子どもたちが、学校帰りにうちの前を通った時に、雪玉を窓に投げつけてくる。驚いて、自分の子どもを抱きながら外に出ていくと、彼らが私を囃子立てるわけです。「おい、チビデブッチョ、出て来い！（Hey! Little fat man, come on out!）」と叫んでいました。こちらが「やめろ（Cut it out!）」と怒鳴ると、逆に面白がって、毎日、やってくるようになりました。春になって雪が溶けたら、雪つぶては、やがて、石つぶてとなり、大きい石がドーンと庭に投げ込まれる。外に飛びだして追いかけようとしたのですが、それはさすがに止めました。なぜかと言うと、捕まえたら、私自身おさえがきかなくなって何をするかわからないからです。もし、そんなことにでもなれば、待っていましたとばかりに、親たちが私たちを訴えることになるでしょう。そこで、写真に撮るだけに留めておりました。見かねた隣家の白人の娘さんが、子どもたちを追い払ってくれました。それから、ぱたりと嫌がらせは止みました。

こうした体験を自分自身試してみても、私は、「待てよ、私自身も同じことをやっていたな」と余市の河原での記憶をかみしめることとなったのです。

やがて、私はその地域から引っ越しましたが、それから4年後、サンダー・ウーマン（雷女）という先住民の女性首長で先住民（ネイティブ）の伝統文化を教えている方と一緒にその地域の小学校を訪れたことがあります。彼女は、葉草のセイジを焚いた煙で身を清める先住民（ネイティブ）の儀式〔注記：日本のお寺でお香を焚いて清めることと同じ〕を見せていました。相手と向かい合う前に、目を浄める、手を浄める、そういう儀式でしたが、彼女の活動取材しに行っても驚きました。かつて、私の家に石を投げ込んだ近所の子どもたちもその会場にいたのです。彼らは私のことなど覚えてない様子でしたが、私の方は写真も撮っておりましたので忘れようにも忘れられません。

しかし、学校の雰囲気は4年前とはかなり変わっていて、廊下に中国語のポスターがずらりと並んでいました。トロントが推し進めてきた多文化主義が、その学校までしっかりと浸透してきていたのです。このようにして、差別意識は徐々に変化していくものかをつくづく実感させられまし

た。もちろん、こうした多文化主義が浸透していくまでには、長い前史がありました。日系人は、リドレス運動を乗り越える必要があったのです。

リドレス運動の成果

リドレス運動とは何か。Re は再びという意味であり、Dress は装うことです。では、日系人にとって、Redress とは、いったい何であったかが問題となります。真珠湾攻撃後、日系カナダ人約23000人が、財産を奪われて強制収容所に送られました。そのなかには、帰化した1世たちもおりましたが、60%以上はカナダ生まれでカナダを祖国として育った2世です。それにもかかわらず、戦争が始まった途端に、「日本人として生まれたからには、汝は敵国民だ」とみなされ、家・漁船、あらゆる資産を身ぐるみ剥がれ、森の中につくられた収容所に収監されたのです。長い方で、4年間あまりも、収監された者もいました。終戦後も、1949年まで多くがもと住んでいた西海岸のバンクーバー近辺には戻れませんでした。

1945年、戦局が明らかになると、カナダ政府は、日本に帰るか、東部に移動するかを日系人に選択させました。最終的に、日本に帰るという選択をした人たちは4000人ほどでしたが、あとは、カナダに踏みとどまることを決めました。そうした人たちは東部カナダ、すなわち、トロントやモンクトリオールなどに向かい、その多くがそのまま再定住しております。

三国同盟を結んでいたドイツ系、イタリア系カナダ人に対してはここまで徹底した政策は取られなかったわけで、日系人は人種差別によって収容所に入れられ、かつ、財産を奪われたわけです。市民の権利（Civil Rights）、さらに、基本的人権（Human Rights）さえも侵害されたのです。

こうした不正行為に対する抗議運動が、戦後ずっと続いておりました。1988年9月22日、リドレスが成立します。日系人を代表して全カナダ日系人協会（NAJC：National Association of Japanese Canadians）が連邦政府と交渉し、最終的に決着をみたのです。「民主主義を修復し、新たに歴史を書き直す」という意味合いを込めて「リドレス」と呼んでいるのです。それは、民主主義を取り戻すと同時に、平等の追求でもあり、カナダにおける主流社会と平等になるという意味も含んでおりました。政府補償として個人1人あたり21,000ドルが給付されました。日系カナダ人コミュニティとしては、総額2400万ドル（約20億円）を獲得しました。もちろん、カナダ国民の税金を使って補償するわけであり、カナダ国民＝納税者も責任を負ったこととなります。つまり、これによって、「このような過去の過ちは、もうけっして繰り返しません」というカナダ国民の未来に対する約束ともなったわけです。リドレスとは、「未来に対する約束」でもあったのです。

以来、2008年で20年が経過しました。昨年は、各地で記念行事が行われました。3日間にわたるバンクーバーでの会議（次頁写真を参照）に出席したのが、アート・ミキ氏（左から2番目）という20年前、リドレスを解決した際の全カナダ日系人協会（NAJC）会長です。次頁写真で、その隣の女性がエイヴィー・ゴ氏という中国系カナダ人協会の方です。彼女は弁護士で人頭税、従軍慰安婦問題など人権活動家としても活躍されている方です。そのさらに隣がウクライナ系代表です。なん



2008年9月 バンクーバーにおける日系リドレス成立20周年記念行事

でウクライナ系の代表がいるかということ、彼らも第一次世界大戦の時、ドイツ側の人間と見なされて収容されたからです。5000人ほどが2年にわたって収容されました。それに対する謝罪を求める運動がずっと続いてきました。日系人がリドレス運動をしているときに、彼らも加わって支援したという経緯があり、20周年記念で挨拶されているのです。その隣が黒人系を代表する人です。もちろん黒人も、現在もなお、ひどい差別の対象になっています。すなわち、特定の人種に対する差別や偏見（Racial Profiling）の存在は、多文化主義国家カナダが、今なお、抱えている問題なのです。たとえば、警察官が走っている怪しげな車を止めて任意で事情聴取する場合、黒人たちが一番その対象にされる傾向が、今もなお続いているのです。

黒人の歴史に関しては、カナダとアメリカとは少々違うところがありまして、奴隷解放前の逃亡先としてカナダがありました。すなわち、アンダーグラウンド・レイルロードと呼ばれる秘密のルートであり、国境を渡って、黒人たちが逃げて来る。そして、支援者がそこで出迎えるというわけです。戦後間もなく、アメリカ国境に近いルートの出口のところに住んでいた黒人の野球チームと日系人の野球チームが一緒にプレイしたそうです。チャザムというオンタリオの南の方の町ですが、彼らはアメリカから逃げてきた人たちの末裔だそうです。

上掲写真の右端にいる方はコマガタマル（駒形丸）基金の代表者です。1914年、インド系の人たち、すなわち、パンジャブ系の人たちが移民しようと駒形丸という日本船を香港でチャーターして、カナダにやってきました。まず、ハワイに入ろうとしたが断られたので、カナダに受け入れを希望して、バンクーバーまで来ました。しかしながら、数カ月にわたる交渉の末、結局、入国を拒絶され、そのまま送り返されました。水や食物の不足も加わり、帰る場所もないという状況で非常に苦勞されたという記録が残っています。

さて、リドレス運動の最後の盛り上がりは、1988年4月、オタワ国会議事堂前でのデモ行進でした。その日、デイビッド・スズキ氏は日系人たちに対して、「われわれのリドレスの戦いは、過去500年もの間、差別に苦しんできた先住民と連帯することによって初めて完結する。差別反対運動に連帯することによって、われわれの闘いは発展する」とのアピールを出しました。

リドレス成立後、このアピールを受けて全カナダ日系人協会は、「今後は、先住民支援に向けて努力をしていこう」と動き始めます。エイブ・カバヤマ氏という聖公会の信者で化学者が中心となって小委員会を率いていきます。

彼は、『日系ボイス』のインタビューに答えて、「われわれは侵略者の一部である」と、はっきり規定しています。「先住民の土地をわれわれも侵略してきた。他方で同時に、われわれは差別の犠牲者でもある。こうした二重の視点を持って、同じマイノリティとして先住民が謝罪と補償を求める運動を支援していこう」と語っております。すなわち、日系人も先住民も、同じく「ビジブル・マイノリティ (Visible Minority)」であるという立場に立つということです。ビジブル・マイノリティ＝見てわかる少数派。これと対語になっているのが「インビジブル・マイノリティ (Invisible Minority)」であり、見た目には分からない少数者です。低収入者、同性愛者、知的障害者、シングルマザーも、インビジブル・マイノリティに属すると言えるでしょう。

ビジブル・マイノリティであること

ビジブル・マイノリティであること、これについては、かつて、『日系ボイス』（1989年6月号）に掲載されていたある記事を思い出します。じつは、『日系ボイス』の編集者になる前に読んで、てもなく感動してしまい、それが、『日系ボイス』に関わる契機ともなったからです。

では、そこに何が書かれていたか。投稿者は日系2世女性で、タシメという強制収容所で生まれ育った方です。それから44年を経ても、彼女はずっと日系人であることに後ろめたさや罪の意識を感じて生きてきた。それに対して、日系人リドレス運動の勝利は、その後ろめたさや罪の意識が全く根拠のないものであることを証明してくれたというのです。彼女は、「今、私は生き直したいと思う。すべてを許して過去を水に流して自分を開花させたい。もう一度生き直したい」と言います。「生き直したい」「日系人コミュニティを再建したい」という意識が、リドレスを獲得した後の日系人コミュニティの中に高まっていったのです。

その頃、私は新移住者としてカナダにおいて生活を始めて、まだ数年たったばかりでした。トロント大学で老人学を勉強していて、学位をとったら日本に帰ろうと思っていました。2人目の子どもができたこともあって、なかなか、日本に帰る機会を持ってないところに、「日系人のための新聞の編集をやらないか」と声を掛けられました。ジョイ・コガワという日系の著名な作家からも、電話で何度か誘いを受けました。「この新聞の読者はほとんど老人であり、老人学を学んでいる方にはぴったりだ」と言うのです。そうした薦めに、心を動かされたという経緯もあります。

仕事に就いて分かったのは、残念ながら日本語紙面の読者である1世たちは1900年代から1920年代までに生まれた人たちがほとんどであり、すでに、後期高齢者でした。高齢者の分類で言えば、ヤング・オールド (Young Old)、ミディアム・オールド (Medium Old)、オールド・オールド (Old Old) と区分けされていますが、読者のほとんどは、75歳以上のオールド・オールドでした。「私はもう目が見えないのでキャンセルいたします」と寄付金を同封した購読中止通知をいくつも

目にしております。このように、1世たちはすでに新聞の購読が難しくなっていました。その当時、周囲には何百人もおりました。こうして、『日系ボイス』の編集者としての生活が始まったのは、1989年9月のことでした。20年経った今、周りにいる1世は、たった2、3人です。1世世代は、すでに、消滅しつつあると言えるでしょう。

さて、『日系ボイス』に入って直ぐに見えてきた日系社会の問題は、戦後新移住者と日系2世・3世たちとの間でほとんど交流がないということでした。私の仕事は、その橋渡しであると理解し、新移住者もターゲットとすることにしました。

日系コミュニティにおいては、英語をしゃべる人たち（日系2世・3世）と日本語をしゃべる人たち（新移住者）が交わる接点がないのです。どういうことかということ、新移住者、なかでも、企業駐在員（3～5年ほど滞在）は、カナダ社会においてマイノリティの一員であるという自覚がないのです。駐在員は、「私は日本人である。日系人カナダ人ではない。マイノリティであると見なされたくもない」と考えがちです。また、「あまり日系人と付き合うとどこかずれてくるので付き合いたくない」という駐在員さえいます。もちろん、最近はそうした姿勢も変わってきており、進出企業として現地に貢献しなければカナダにおける企業コミュニティの一員として認められないという自覚が確立され、日系企業も、日系文化会館（日系人のためのコミュニティー・センター）に寄付したりしています。

「ビジブル・マイノリティであるとはどういうことか」、これをどのように日本語紙面で新移住者に伝えるかが私の『日系ボイス』における当面の目標となりました。その時、私を強力に支えてくれる男性が現れました。正岡治という牧師の資格で移住してきた方ですが、非常に博識でした。カナダ政治に詳しいだけでなく、永い間、単独で人権問題と取り組んできた人でした。日本では学生運動にかかわり、その後、東南アジアの地雷の埋まっている地域で農業指導をした経験もある人でした。残念ながら5年後（1994年）に自から命を絶っています。

日系人社会とカナダ先住民

『日系ボイス』編集の手始めに「日本にも同じマイノリティ問題があるということを示そうじゃないか」という狙いから、最初に取り上げたのが在日朝鮮・韓国人問題です。歴史的背景は違いますが、同じ戦争によって被害を受け、犠牲者となったという点で、日系人問題と似た部分があります。当時、在日たちは2、3世の時代になっていて、在日の目から見た日本史を書こうと、すでに神奈川県では歴史教科書を出版する動きがありました。

次頁のブックカバーの写真は、ジャック・マッキントッシュというカナダ長老派教会の牧師が妻ベスと2人で裁判所に入るところです。彼は同じ在日外国人として「私も指紋押捺を拒否する」と宣言して裁判闘争に持ち込んだのです。彼を支援する本、すなわち、『在日に賭ける』が出版されましたが、これを紙面で紹介することから、私の仕事は始まりました。結果として、「日本の学校では全然習わなかった裏面史にふれた。いい勉強になった」という投書をくれる人びともおりました。



『マッキントシュ牧師の「在日」にかける夢 宣教活動25年、指紋押捺を拒否して』（キリスト新聞社、1987年）

ところで、先程紹介した日系人側の「後ろめたさ」に関して、未だに、なんで先に紹介した投書に感動してしまったのか、よく分からないのですが、後に、アイヌの若い女性に、「日系人であることを後ろめたく感じていた人たちがたくさんいる」と、この投書の話をする、「アイヌも同じだ。アイヌであることが非常に重荷になっている」という言葉が帰ってきました。若いアイヌは、主流社会に吸収されて、どんどん消えていってしまう。名前を見る限りにおいては、アイヌであるかどうかは、ただちに分かりません。明治期に、政府の役人が勝手に萱の生えている野にいたから、「萱野」だとか、沢があって貝がたくさんあるから「貝沢」だとか、アイヌたちに名字を与えたという経緯があるからです。「貝沢正」と書いてもそれがアイヌであることは直ちにわからない。社会のなかでアイヌの存在を消して生きていく人がいる一方で、いかにもアイヌ顔という人たちもいます。鳩沢佐美男さんというアイヌ作家は、「見てくれがアイヌのように見え

なくても、アイヌであるという意識は心のどこかにある。それを抱えながら生きていることが、とても重荷になっている」と語っています。そういうネガティブなアイデンティティのあり方、つまり、負の自己意識を受け継いでいるマイノリティがいるのです。カナダの先住民にも多くいます。

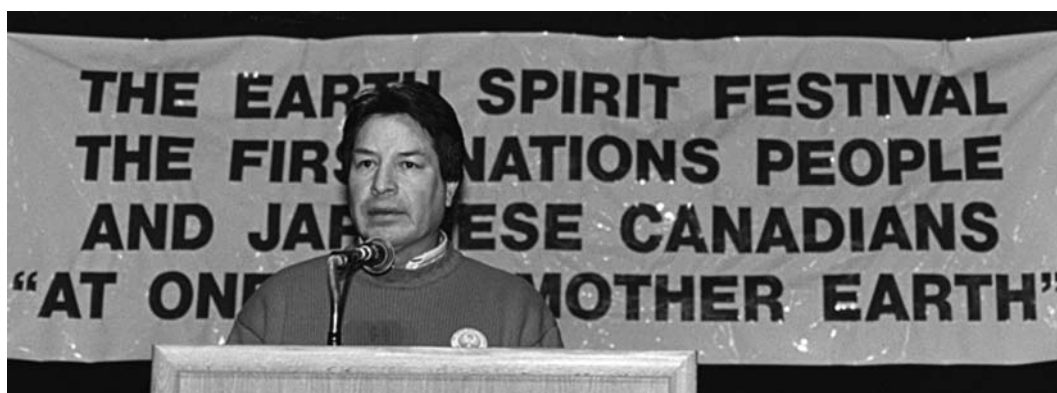
ところで、私が『日系ボイス』に入社した翌年（1990年）に、とんでないことがケベック州モンクトリオール市でありました。その先住民居留地のオカというところで、先住民の聖地をゴルフ場にするという計画があり、それに対して怒った先住民たちが立ち上がったのです。3カ月近く道路を封鎖し、ケベック警察とほんとに撃ち合い寸前になりました。

オカの戦いが始まった時、日系人は翌年91年に向けて、先住民と一緒に「大地の霊の祭り」というお祭りをしようと準備を進めていました。日本の伝統として、神道というのはある意味でアニミズムだと思いますけども、アイヌも同様に、自然を崇拝する伝統を持っている。その共通項をもとにして、先住民と日系人とが協力して祭りを開こうということになったのです。失われた自然に対する尊敬の念を取り戻そうという企画でした。ちょうど、その時にオカの問題が起きたので、日系社会は奮い立って一緒に行動を起こしました。「大地の霊の祭り」準備委員会の発足を兼ねて、トロント市内の教会で日系人、先住民、一般カナダ人が一緒になってイーグルハート・ドラマーズのドラムに合わせて輪になって踊りました。

インディアンという言葉をご承知だと思いますが、当然、カナダの先住民はインド人ではありません。コロンブスがたどり着いたときに、勝手に、インドだと勘違いして原住民をインディアンと

呼んだことが語源です。インディアンと呼ばれたくない人はたくさんいます。では、どういうふう
に称しているかという、ネイティブ (Native)、すなわち、原住民、そこで生まれた人間という呼
称です。もう1つ、彼らを選んだ自分たちを呼称する名前として、「最初にあった国々の人びと
(The People of First Nations)」という言い方があります。つまり、15世紀に白人が入ってくる前に
すでに最初にあった国に属する人たちということです。以来500年間、どんどん侵略されていくわ
けですけども、もともと、そこで社会秩序に従って生活していた住民であるという意味合いが込め
られています。

1990年、日系文化会館で開かれた募金イベントに、オンタリオ州先住民首長であるゴードン・ピ
ーターズ氏が現れて支援を訴えました。何が居留地で起きているか、それは第1に、若者の自殺と
いう深刻な事態であると言うのです。若者の自殺率は、日本も高いですけど、カナダの先住民の場
合、その比ではありません。居留地の先住民の若者たちは、どんどん、自死していくのです。第2
に、居留地が経済的に自立していないという問題であり、そして、第3に、自らの言語の保存も
ままならないという現実であると訴えました。「このままですと、部族の文化伝統は言語とともに
消えてなくなる。21世紀にほとんどなくなる」というのです。実際、その通りになりつつありま
す。



1990年 支援を訴えるオンタリオ州チーフ ゴードン・ピーターズ氏

その数年後、『日系ボイス』は、彼にインタビューしていますが、その時の写真では、彼は憔悴し
た顔を見せており、彼の居留地で5人まとめて若者が自殺するという事件があって、「責任をとっ
て辞めたい」と語っていました。

さて、先程のオカ危機（オカ・クライシス）は3カ月間続きました。映像作家アラニス・オボン
サウィン（Alanis Obonsawin）（英語・クリー語・フランス語に堪能であり、歌手でもある）が、先
住民がバリケードを作ってピケを張っているところを内側から撮った『カナサタケ-270年の抵抗
(Kanesatake-270 Years of Resistance)』という映画があります。「カナサタケ」とは居留地の名称
です。他にガナワケ族、アベナキ族などの先住民と一緒に、モーホーク族のこの抵抗を支援

しました。

オカ・クライシスについては、当時毎日、報道されていました。日系人も「大地の霊の祭り」の準備を進めながら支援のイベントに参加しました。日本人平和活動家もオカに入り込んでいます。いったい、どのようにして入り込めるかですが、先住民（ネイティブ）たちは、カナダとアメリカの間に、国境などを意に介さないテリトリーをもっていまして6カ国連合（Six Nations）と称しています。これはじつにニューヨークからオンタリオまでつながっているのです。彼らは、その間を自由に往来しています。もちろん、警察が取り締まっており、怪しいモーターボートなどは臨検するのですが、船底までは見ない場合が多いので、日本人活動家も、そうした先住民の手助けで、侵入できたのです。ある日本のお坊さんも船底に隠れてオカに行き、バリケードの中の焚火の周りで氣勢を上げたり、祈ったりしていました。日本山妙法寺の幟も、映画には確かに写っています。93年に映画「カナサタケ」がトロント映画祭で上映されたときには、5分間以上オベーションが続いて、拍手が鳴りやまなかったのをいまでも鮮明に記憶しています。

シンボリック的存在の女性がエレン・ガリエル氏で、トラックの上に登って拳を上げている映像もありました。1992年に来日し、明治学院大学で開催された世界先住民会議「もうひとつのコロンブス500年—先住民族の英知に学ぶ」に登壇しています。

世界先住民会議にはアイヌから萱野茂氏、米国のホピ族代表、モーホーク族代表のエレン・ガブリエル氏、グアテマラ先住民からリコベルタ・メンチャー氏（ノーベル平和賞受賞者）などが集まっています。デイビッド・スズキ氏が基調演説しました。本研究会に出席されている嘉本伊都子氏（京都女子大教員）は、学生のときに通訳ボランティアでその会議を手伝っていて、エレン・ガブリエル氏を成田空港まで迎えにいったそうです。彼女はカナダの旅券は使わずに6カ国連合の旅券をもって現れたそうです。

1991年7月の「大地の霊の祭り」を経験して私の人生航路が大きく変わりました。その後に「従軍慰安婦問題」が続くわけで、おそらくこの2つで、僕の人生は決定的に方向付けられたと思います。

アイヌとの連携

トロントで「大地の霊の祭り」の準備を進めていた時、先にも紹介したジョイ・コガワ氏から詩の朗読会に誘われました。彼女は、カナダを代表する日系人作家であり、『オバサン』（邦題『失われた祖国』二見書房）という小説で、一般カナダ人に、日系人がどういう戦争体験をしたのかを初めて知らしめた人です。彼女の自宅で詩の朗読会があり、先住民（ネイティブ）たちも何人か集まっておりました。私は、正岡治氏と一緒に出席しました。その際に、「北海道にもアイヌという先住民がいる」と発言すると、それを待っていたかのように、ジョイ・コガワ氏は即座に「アイヌを祭りに呼べないか?」と言ってきました。われわれは、断るすべもなく、「やってみよう」ということになりました。

正岡治氏も北海道出身でして、2人で手紙を書いたり電話したりして、半年くらいの準備の末、萱野茂氏とその一行が祭りに来ました。右に掲げた写真で萱野茂氏の隣は玲子夫人です。その横が姪の貝沢ルミ子さんです。とくに、ルミ子さんは祭りに来てすっかりカナダが気に入ってしまい、私の拙宅に半年滞在していくことになります。私の子ども2人とも彼女に懐いてしまい、二風谷で開催された舟送りの祭りで、アイヌの子どもたちと一緒に混じって、「雀の舞」を踊るといふこともありました。そんな交流を続けています。

この「祭り」が始まる3日前の朝日新聞(1991年7月1日朝刊)の「論壇」に、「大地の霊の祭り」理事、アイヌ問題委員長であった村田デビッド宣恒(カナダ合同教会牧師・当時)

の名前で、「民主主義修復迫るアイヌ問題」と題した投書が掲載されました。萱野茂氏、貝沢正氏(同氏の没後は、息子の耕一さんが訴訟を受け継いだ)が、彼らの土地をダム建設のために売り渡すことを拒否したのです。いわゆる北海道平取町二風谷ダム反対闘争です。こうした闘争に対して、日系カナダ人として支持するという主旨で投稿しました。そこに書かれている先住民の問題は、現時点で読み直しても、われわれが今、考えなければいけない問題としてあると思います。以下、引用しておきます。

「少数民族として被差別の歴史をきた日系カナダ人として、さらにカナダ先住民族と共同で今月開く『大地の霊の祭り』にダム反対者の萱野茂氏らを招いた主催者として、深い義憤を感じている。日系移民という少数民族の視座からアイヌ問題が日本人に提起しているのは、民主主義の修復、先住民族の文明尊重、異人種少数派、ビジブル・マイノリティは、いつも予め民主主義の枠外に置かれ、支配の対象でしかなかった。今日、少数派の権利も多数派と同等に扱われねばならないという民主主義をリドレス、修正、修復する運動が、世界的な1つの潮流となりつつある。その好例として日系米人・日系カナダ人のリドレスがある。

日系カナダ人は第2次大戦中、2万人のほぼ全員が強制収容された。1998年、カナダ政府はこれが人種差別にもとづく不当な処置であったことを認めて、米国に先だって〔注記：米国の決定の1カ月後の誤り〕謝罪し、補償金を支払った。過去の政府の過ちを現在の政府が認知することになった民主主義の修復、これは未来に対する決意の表明でもある。また先住民族は現代文明と与しえない世界観を持つが故に少数派であり続けている点に、今こそ注目すべきである。母なる



1991年トロントで開催された「大地の霊の祭り」
(写真撮影：井上ヨシ)

大地を蝕む病状はすでに末期的な症状を見せている。残された可能性は自然と息を合わせて生きてきた人類の原初に帰るすべを知っている彼らにこそ学ぶことではないのか。彼らこそ人類の希望ではないのか。

私たちはカナダ先住民族の勇気と知恵が遺憾なく発揮されるのを見た。昨年夏、ケベック州オカでモーホーク族が彼らの聖地に計画されたゴルフ場建設反対に立ち上がり、計画を中止させたのである。たとえば伊勢神宮をゴルフ場にするとでも想定すれば事の重大さが日本人にもわかるかもしれない。多数派の民主主義が少数派に屈する歴史の一瞬であった。少数派を中心とする人権擁護と環境保護を両輪とする運動が多数派を巻き込む形で展開された時、極めて大きな力となりうることが証明された。

二風谷アイヌにとっては聖なる沙流川を堰き止めて建設されるダムは明治以来繰り返されてきた和人による収奪の再現だ。二風谷ダムの大半は買収攻勢に屈していった後、2人のエカシ（長老）が人柱になる決心で残った〔注記：萱野茂氏と貝沢正氏のこと〕。ここにあるのはヒロイズムなどではない。少数民族の怨念である。数千年にわたり住んできた大地を奪われることは血肉をむしりとられ、自己アイデンティティまで破壊されるほどの致命的な損傷ではないか。その痛みを多数派は共有しえないが、せめて北海道を観光で訪れる人たちは、アイヌに対する自分たち日本人の侵略の歴史のひとコマを目に焼き付けてほしい。

われわれ日系人のリドレス運動は多くの非日系人、とりわけ存在を無視されてきた先住民族の支援を得て実った。そこからさらに長く苦しんできた人たちを支援しなければと連帯が発展した。7月5日から3日間、日系人とカナダ先住民族、インディアン、イヌウィット、インヌー〔注記：ニューファンドランドの北のラブラドル地方に住んでいる人たちは、イヌウィットではなくインヌーと呼ばれている。イヌウィットもインヌーも、アイヌと同様に、「人間」という意味。どこかに共通の原初的な音声の発露があるように思われる。「われわれは人間である」というのは、おそらくは白人が来たとき、「何者だ？」と聞かれて、「イヌウィット、すなわち、人間だ」と応じたのだと思われる〕の祭りを開催した〔注記：この3日間の祭りに延べ10万人が来場。ハーバーフロントを中心にシンポジウム、コンサート、展示会が開催された〕。この祭りは物質文明の底辺にあえぎつつも、なお大地とともに生きる先住民族独自の文化と思想をアピールするもので、深刻な環境汚染をもたらした現代文明へのアンチテーゼを提示する場ともなる。日系カナダ人の呼びかけに応じた萱野氏らの参加を心から歓迎する。（朝日新聞1991年7月2日号「論壇」）

民主主義というのはご承知のように多数決原理です。ところが私が、一連の活動で学んだことは、デイビッド・スズキ氏も言っていますが、「正しいことを言い続ければ、多数派はわれわれを無視することはできない。多数派もわれわれ少数派の存在を認めざるを得なくなってくるんだ。日系人は票田としても小さいし、たいして政治的な力を持っていないが、正しいことを言い続けることが大切である。多数派が少数派に屈することもある」ということでした。

この論壇に掲載された文章を読んだNHKのプロデューサーがドキュメンタリーをつくりたいと、トロントに飛んできたのを覚えています。その翌年の暮れにデイビッド・スズキ氏以下、エレン・ガブリエル氏らが前述の世界先住民会議で日本に渡ったとき、NHK教育テレビが「デイビッド・スズキが北海道を巡る10日間」をドキュメンタリーにして放送しています。非常に良い作品です。

ルビコン族森林皆伐問題

1990年代初頭、「大地の霊の祭り」と並行して起きていた事件は、アルバータ州ルビコン族が直面した森林皆伐問題です。すなわち、アルバータ州ルビコン族が所有権を主張する森林の大昭和製紙カナダによる皆伐問題です。下の写真はどこで撮っているかというと、トロントにある大昭和製紙カナダが入っているビルの前です。そこでフレンズ・オブ・ルビコンという支援団体のメンバーと先住民が輪になって踊って太鼓を叩いています。そこに登場している3世ヴァン・ホリ氏（NAJCトロント支部会長・当時）が、日系人協会を代表して支援を表明しています。



アルバータ州ルビコン族の森林皆伐問題支援の「日系ボイス」報道写真

その際に表出してきたのが、先住民支援と日系企業の狭間に立たされる日系社会という問題です。大昭和製紙カナダという進出企業に勤める駐在員や家族が居住まいの悪い思いをしたことも確かです。この問題を記事にしたのは『日系ボイス』だけで、当然、私も嫌われました。それにもかかわらず当時の全カナダ日系人協会（NAJC）は先住民を支援する姿勢を崩しませんでした。

じつに8年に亘って裁判は続きました。NAJCは大昭和製紙の製品不買運動を正式に支持声明します。ところが、逆に支援グループは大昭和製紙カナダに営業妨害だと逆提訴されました。

1991年、『日系ボイス』10月号でも報じていますが、オミヤク氏ら代表4名が日本キリスト教協議

会の招きで日本に9月から1か月間滞在し、市民団体、アイヌ団体と会談した後、東京大手町の大昭和製紙本社前で集会を開きました。そこで、サチコ・オクダ氏というNAJC人権委員会の委員長が声明を発表しました。日系人新移住者の側にも、ルビコン族を支援する人たちがいて、「バンクーバー移住者の会」代表の鹿毛達夫氏がこの問題に対する日系人のかかわり方について、「日本に対する批判を避けるべきか、それとも、一カナダ市民として日系企業に責任ある態度を求めるべきか。これを考えていただきたい」という主旨の記事を『日系ボイス』に書いています。

さて、この逆訴訟とは、どういうことかという、大昭和製紙の紙を使って売っているピザ屋さん前でピケを張って、「このピザの入っている箱は大昭和製紙カナダが作ったもので、この企業はルビコン族が所有権を主張する土地で、ブルドーザーですべて木をなぎ倒すというような森林皆伐をしている。皆伐の後は砂漠状態になってしまう。それを蘇生させるのは非常に時間がかかる。皆でこうした不当な行為に反対しよう」と訴えたのです。この製品不買運動に対して、「これは営業妨害である」と大昭和製紙は逆に訴えたわけです。

その時にスローガンとなったのが、「ストップ・ザ・ジェノサイド」という標語です。森林伐採は、ルビコン族にたいする民族抹殺、大量殺戮であるという意味が込められています。ジェノサイドという言葉に対して、大昭和製紙は「これは事実無根で名誉棄損だ」と訴えました。大昭和製紙カナダは、カナダ連邦政府、アルバータ州政府から許可をもらって森林伐採をしているのであって、やましいところはないと言うわけです。

一方、ルビコン族たちはカナダ政府、州政府と土地権所有権を巡って、ずっと裁判闘争で争ってきたという背景がある。そうした経緯を尊重して欲しいと、ルビコン族側が大昭和製紙と話し合い、一旦は、「土地権問題が解決するまではルビコン族の聖地と指定している森林には手は出さない」という口約束をしていたにもかかわらず、それを無視したのです。そうした行為に憤って反対運動が立ち上がったのです。

結局、裁判の結果、裁判官は「フレンズ・オブ・ルビコンの不買運動は正当な表現の自由の行使である」と認定しました。大昭和製紙の製品を買ってくださいという広告ができるのなら、こういう理由で買わないでほしいという表現の広告も可能であると、フレンズ・オブ・ルビコンの訴えを認めて、原告側訴えを棄却しました。しかしながら、さすがに、「ジェノサイド」という表現は、中傷誹謗にあたり、これに対しては罰金1ドルを課す、という判決でした。以後、皆採は停止されました。すでに、大昭和製紙という社名も合併吸収により無くなっています。

北西準州デネー族、そして、オンタリオ州グラッシイ・ナロウズ居留地の悲劇

もう1つ紹介しておきたい事件があります。ノースウェスト・テリトリー、すなわち、北極の近くにいる先住民デネー族の悲劇です。そこで採掘されたウラニウムが広島に投下された原爆製造に使われていたのです。この事実は90年代になってやっと明らかになってきました。

マンハッタン計画という原子爆弾製造計画、そのウラニウムをどこから入手したか。それがカナ

ダからであったというニュースは衝撃的でした。カナダの国営公社 (Royal Corporation) が、北西準州のデネー族たちの住む土地にあるウラニウムを採掘しアメリカに売ったわけです。では、誰が採掘したのか。それは、デネー族の男たちでした。彼らはウラニウムの危険性を一切知らされずに雇われて、洗浄シャワーの設備もなく、露天掘りの仕事に従事したのです。その結果、採掘に従事し被爆した男たちは次々と死んでいったのです。

そのため、村は未亡人だらけになってしまった。男手がないまま、女性たちは子育てをして非常に苦勞したということです。この事件を90年後半になって、やっとCBC (カナダ国営放送) が取り上げて、カナダ国民が知るところとなります。

下に掲げた記事中写真のシンディ・ケニー・ギルディ氏がデネー族を代表してトロントに来たときに、その窮状を訴える集会がマリカ・オマツ (雄松) 氏 (トロント大学教授フランク・カニガン氏の夫人) という日系3世でアジア系唯一の女性裁判官の自宅でありました。マリカ氏は裁判官で、政治活動はやりにくい立場にあるでしょうがじつに積極的に支援してくれました。

デネー族の妻たちが「何が自分の夫に起きたのか」を初めて認識したのは、1997年に米国人の写真家のロバート・デルトレディッチが、この村で4日間に亘り説明会を開いたときでした。生まれて初めてウラン鉱の放射能の恐ろしさや原爆について学んだわけです。

「今、デネー村民たちは原爆製造の一端を担ったことを知り、非常に罪の意識を深くしている。デネー村民は原爆記念日に代表者を広島に送り、8月15日、デネーの先祖の祭りに広島から被爆者を招待し、供養したいと考えていると語った」と『日系ボイス』で伝えました。

<14>...『日系の声』1998年6月号



カナダ北西準州グレート・ベア・レイク周辺
デネー族の住むデネー地区

石の入った袋を担ぎ出し輸送路に
乗せていた。
一九九五年にデネー族の若者た
ちが政府に雇われて、ラドン・ガス
を防ぐマスクも与えられずに原爆
働いたことがあった。更に昨年(一
九九七年)には、若者十名がわずか
二時間の研修を受けた後にソーミ
ル・ベアの汚染土の除去に雇われ
た。現場では作業後に放射能物質を
洗い落とすシャワー設備もなか
った。この一番には、ポット、ラヂウ
ム鉱以外に産果らしいものは、後に
も先にもない。

放射能汚染の実態調査等を要求する 北西準州グレートベア・レイクのデネー族 広島原爆記念日に使節団派遣を検討

組んでいるシンディ・ケニー・ギ
ルディ氏は、トロントまで足を運
び、記者会見をこなし、今年四月に
はCBCテレビがニュースで取り上
げるにいたった。
ギルディ氏によると、デネーたち
は、カリブ海や魚類の狩猟で生活し
ておりサツツ湖の周辺を遊動し、
動物の移動とともに巡回している。

北西準州のグレートベア湖の
よそ四百マイルに位置するサツツ湖
の湖畔に位置するデネー・レイク
の湖畔に位置するデネー・レイク
二テレイには、約八百名のデネー
が居住している。この周辺には彼ら
以外の人の集居はない。サツツ湖
は世界第九位、カナダでは五番目の
広さを誇る淡水湖である。
このサツツ湖の北岸で、一九三四年
から一九三九年までラジウムが採掘
され、次いで一九四三年から一九
六二年までウランが掘りだされたこ
の間に、百七十名以上の死者がサツ
ツ湖に投げ捨てられている。この間
デネー族のデネーの男たちの多く
が、このウラン掘り現場で放射能
性物質に対する何の準備知識も放
れず、防護具もなく、ウラニウム岩



Cindy Kerry-Guidy
デネー族の一人。彼女は
この問題に取組んで
いる。

国内の本バダ州のネイティブ居留地
の近隣の牧場等で原爆実験を繰り返
したのである。広島、長崎に降され
た原爆が本バダ州で製造されたこと
はよく知られているが、使用された
ウラニウムがカナダ北西準州で採掘
されたことはあまりよく知られてい
ない。まして、デネー地域のデネー
に数十年前後に起きた悲劇について
は、最近になって初めてその一端が
明らかになってきたのである。
デネーのコミュニティの問題と取
りかして、積極的にこの問題と戦
っている。

「若者たちだけでではなく、妻
全員が犠牲が明かされた湖や土
地部にさらされている。
この「ホット・スポット」と呼ば
れる放射能汚染地域に隣接して、デ
ネーのデネーたちが住んでいること
は、最近のことである。デネーた
ちにとっては神聖な祭りごとである
ベネット・フィリドも、政府
府によって汚染区域として指定さ
れた。今では、自分たちの土地にも
食べ物である動物たちに、飲み水
にさえも不安を抱えて生きている
。かつてポット、ラジウムで働
いていた男たちは、二十年前か
ら湖に埋されて次々と死んで行き
、一帯は「未亡人の村」と呼ばれ
るようになった。女たちは、糧を
稼ぐ男も家族の半らぬ手もなく、
福祉に頼らざるを得なかった。また
若者たちは教天を乞うべし長老や父
親の安んずるほどとどれずしに
、伝統文化の根が断たれるとい
う危機に瀕している。

シンディ氏は、「さまざまな影響
響つたり文化的、経済的、精神的
情動的なダメージが、このグレイ
ト・ベア・レイクに居住する唯の
先住民族の生存を危うくしている
と訴えを述べた。
デネーたちが何が自分の死んだ夫
や家族に起きたのかを、初めて認識
したのは、一九九七年に米国人の写
真家のロバート・デルトレディッチ
がこの村で四日間にわたり説明会を
開いた時だった。そして、生まれ
れて初めてウラン鉱、放射能、原
爆については説明を受けた」と語
ったという。

今、村民たちは原爆製造の一端
を担ったことを知り、非常に罪の
意識を深くしている。ギルディ
氏は、村民たちは原爆記念日に
デネーの代表者を広島に送り、八
月十五日のデネーの先祖の祭りに
被爆者たちを招待し、供養したい
と訴えている」と語った。

同時に、デネー・コミュニティ
には、カナダ政府に対して、こ
れまでもなされた社会的不正情
況に対して謝罪と補償を要求し、危
険な環境衛生の緊急の改善を求め
ており、現在、ギルディ氏はこ
の二つを実行に移すために広範な
協力を呼びかけている。(田中記)

ファースト・ネーション会議が カナダ政府に真摯調査などの要求を提出

1997年1月4日、ケベック・シティで開催されたファースト・ネーションズの会議で、カナダ連邦政府に対して以下の要求が採択された。(一) 被爆しているおそれのあるデネー地区の環境と人々の保健に関する実態調査を実施する。(二) デネー地区の住民と被爆した犠牲者の家族その他の関係者に対して補償を実施する。これには暫定的措置と恒常的措置を含める。(三) 汚染地域の徹底的な浄化作業を行い、今後の被爆の危険性を軽減する。もしこれらの要求が達成されなかった場合、ナショナル・チャーフとアセンブリー・オブ・ファースト・ネーションズはデネー地区デネー族を支援し、「個別に国際機関による調査を施す」等をフィル・フォンテン(ナショナル・チャーフ)の署名をもって採択した。

このように、『日系ボイス』では、1990年代初頭からずっと先住民の諸権利侵害や資源開発問題を取り上げてきました。ルビコン族の裁判闘争が終わったのが2000年でじつに8年かかったことは、先に説明しましたが、それと並行して起こった問題として、西海岸の原生温帯雨林伐採問題があります。すでに伐採が進んでおり、いまでは、全体の20%ほどしか残っていないそうですが、そこの大木が生い茂っているクワキワット・サウンド地域の先住民が彼らの聖地の伐採に反対の声を上げたのです。これに対しても、日系人たちは、トロントで座り込みをするなどして支援する姿勢を見せました。

この伐採問題のときにやり玉に上がったのが、またもや日本でした。それも神社仏閣の修復のために原生雨林の大木が必要となり、その伐採が問題となったのです。これについても、『日系ボイス』は取り上げてきました。

最後に、オンタリオ州グラッシー・ナロウズ居留地で起こった水俣病問題を紹介しておきましょう。製紙会社が工場で水銀を使い、それを1950年代から湖に垂れ流していた。その湖で生息している魚を食べた先住民たちが水俣病に酷似した症状を示したのです。1975年に、水俣病の患者とかわってきた原田正純医師らが、カナダに来て実態調査をしています。そして、明らかに水俣病の兆候であると診断しております。

その翌年に、トロントにいた日本人移住者の写真家、宮松宏至氏がグラッシー・ナロウズに移り住んで、6年間、彼らがどういう状況で過ごしているかを写真と本にまとめております（『インディアン居留地で見えたこと』草思社、1983年）。当時の先住民の生活がどういうものだったかが、よく表現されています。彼らは伝統的な生活を続けてきたわけですが、いきなり居留地に収容されて生活のすべがない。政府からの援助金で暮らしているのですが、心は、すさんでいくわけです。夢も希望も描けない。そういう状況で、子どもたちは日本でいうシンナー遊びにはまり、ガソリンを嗅ぐわけです。あるいは、アルコール依存となっていきます。元来、彼らは日本人と同じように体質的にアルコールに弱いところがあるようで、イヌウィットもすぐ酒に溺れるのです。教育も技術も無いので居留地の外では仕事にありつけない。居留地で生活していると、テレビには彼らの生活とはかけ離れた都市部での別世界が映し出される。自分の現実とのギャップに悩んで希望を失って死んでいく若者が続出する結果となる。

グラッシー・ナロウズの問題は今も尾を引いています。いくらかの補償は、企業と州政府とでしていますが、十分というレベルからはほど遠い。体内に溜まっている水銀値は規定の水準値の下であるので水俣病とは認定できないと政府側は主張します。ところが2003年、原田医師が、再度、来られて調査すると、「水俣病特有の病状はどんどん進んでいる。微量でありながら魚を食べ続けていると、症状はさらに進行する」と言ったということです。大類義（おおい・よし）氏という新移住者がウィニペグの日系機関紙に記事を書いています。彼らをサポートしている人で、日本大学で映画の製作を教えていた人ですが、カナダ人と結婚してウィニペグに住んでいて、先住民支援を続けていらっやいます。

日系人アーティストのなかにも、彼らを支援している人たちが何人かおまして、ビジュアルア

アーティストのアイコ・スズキ氏（デイビッド・スズキ氏の妹、ただし、故人）がいました。また、オルター・スナハラ氏（やはり、故人）が、先住民のコミュニティに入って、コミュニティ・センターをつくる運動をしていました。

活動の輪の拡大

未だに、その活動が続いていることとお伝えしておきたいのが、「聖なる走り（Sacred Run）」のことで、1990年代初頭から続いていて、「走ること」を自然と一体になる1つの手だてとする活動であり、日本でも地方から広島まで走るというイベントがありました。その創始者は、デニス・バンクスという人で、アメリカ・インディアンです。アメリカン・インディアン・ムーブメント（AIM）を組織し、ウンデッドニーで1973年に州政府警察と衝突します。それからずっと逃亡生活を送るようになりました。アメリカという国は面白い国で、州によっては彼のような人物を支援するようなどころもある。カリフォルニア州知事は彼をかくまっていました。カリフォルニア州にいる限りにおいては、彼に対する逮捕の手は伸びない。もちろん、州知事が交代すると彼は逃げ出さなければならない。次に逃げていったのが先住民の6カ国連合（Six Nations）の居留地でした。そこで彼をかくまったのが日本山妙法寺の安田純法尼でした（詳細は、デニス・バンクス、森田ゆり共著『聖なる魂—現代アメリカ・インディアン指導者の半生』朝日文庫、1993年を参照されたい）。

安田純氏は、1993年にニューヨーク州グラフトン（6カ国連合の居留地の1つ）で平和の塔を建てて平和運動を続けています。彼女は平和行進（ピースウォーク）を続けており、東欧で戦争があったときも、そのど真ん中まで歩いていったという方です。彼女と一緒に歩いている日本人もたくさんいます。

2008年6月、幕張で平和会議がありましたが、そのときも日本山妙法寺の代表が挨拶しています。カナダの日系人グループ、「バンクーバー憲法9条を守る会」の若い人たちも9人ほど日系人やカナダ人の寄付によって、その大会に出席しています。

1992年の「聖なる魂（Sacred Run）」は盛大に行われ、ゴールはトロント市内の州政府議事堂前でした。右に掲げた写真はゴール地点、法華太鼓を持って写っているのが日蓮宗の黒柳上人です。右の方は、「聖なる走り（Sacred Run）」には毎回参加しているという人です。こういう人たちの顔を懐かしく思い出します。



1992年「聖なる魂（Sacred Run）」

黒柳上人は自ら「外道」だと称していますが、この方がオカ危機の時、ボートに隠れてオカまで行ったという人です。

こうした話をする時に思い出すのは、亡くなった新井利男氏のことです。彼は商業写真家として活躍されていましたが、80年代に、中国残留孤児問題が起きたときに、政府がつくった孤児の特徴を示す書類が不備であることを見て、孤児たちの写真を撮り始めました。それ以降、彼は日本の戦争責任問題に目覚めて、その問題をずっと追いかけていました。彼は、2、3年ほど、トロントに住んでいます。そのときに、日系カナダ人問題とも出会っている。日系人が先住民を支援して祭りを開いた時にもやってこられました。彼が私によく言っていたのは、これら3つの問題は全部つながっているということです。

つまり、底にあるのは人種差別であるということです。植民地経営は人種差別政策なくしては不可能であると断言できると思います。その犠牲になったのが中国残留孤児であり、英国植民地経営の犠牲者になったのが日系カナダ人であると言えます。新井さんはその後、新井利男・藤原彰共著『侵略の証言－中国における日本人戦犯自筆供述書』（岩波書店、1999年）も出しておられます。

結びに代えて：日本における先住民問題の今後

今一度、日本での先住民問題を振り返っておきましょう。1985年、西浦宏己著『アイヌ、いま』（新泉社）というタイトルの本が出ておりました。80年代は、先住民族が世界中で名乗りを上げ始めた頃で、まだ、伝統的生活文化が生のかたちで息づいていた。アイヌも同様で、若い世代が誇りを取り戻そう、長老から固有の文化や言語を学ぼうという機運が盛り上がっていきました。ちょうどそんなときに、私は結婚しました。

白人カナダ人と東京で結婚して、子どもが半年後に生まれて、途端に制度的な差別に出会いました。私自身が日本の主流、マジョリティから外れてしまったということ、嫌というほど見せつけられました。出生届けのために市役所に行くと、「田中・キャスリーン・そのみ」という名前は長すぎてコンピュータに入らないと断られました。納税者として、名前が入るようにコンピュータのフォーマットを変えてくれないかと要求しましたが、係の女性は、「長すぎる場合は手書にすることになっているが、うっかり、そうした対応があることを忘れていました」と謝罪したにすぎません。その後、市役所に住民票を取りに行った妻が泣きながら市役所から帰ってくるという経験をしています。住民票には母親の名前はどこにもなかったのです〔注記：現在は「備考」の欄に書かれるようになった〕。母親である外国人は住民票には存在しないことになっているのです。私が男のマリア様となって子どもを生んだことになるわけです。

また、パスポートを取りにいったときにも、係官が「長っげえ名前だな」と言うわけです。「あなたには関係ないだろう」とその時は非常に憤ったのを覚えています。当時、私は大企業の広報部に業者として入っていて、翻訳とか広告制作の仕事しておりました。それまでたいして苦にはならなかっただろう「毛唐の奴らがな」という広報部の職員が使う何気ない言葉が、ものすごく痛く突き

刺さるようになりました。そんな意識の人間とは一緒には仕事をしたくないという思いが強くなり、カナダ行きを決心しました。

翌86年9月には、いわゆる中曽根発言がありました。「日本は単一民族である。だから非常に知的水準が高い。アメリカというのは黒人とかヒスパニックがいて知的レベルを下げている。日本が知的水準が高いのは単一民族であるからだ」という発言をしてアメリカの黒人団体から抗議状が来ました。ただちに、アイヌたちは民族衣装を纏い、国会前をデモしました。「日本は単一民族社会ではない。日本の中にいる異民族を忘れるな」という抗議の声を上げざるをえなかったのです。それに対して中曽根元首相は、「いや、私も眉毛は濃いし、もしかすると先祖はアイヌかもしれない」と問題発言をごまかそうとしました。その当時、すでに梅原猛・埴原和郎共著『アイヌは原日本人か—新しい日本人論のために』（小学館、1982年）が出ていますが、それを前提とした発言と思われる。2000年前はどうであれ、日本文化とは異なる独自の文化を創りあげてきた人たちが日本にとともに住んでいるという認識が全然ないのです。現在の日本は、どこまで、こうした認識が変化しているのでしょうか。

さて、それから約10年後の1997年、菊地幸工氏という私の親友であり『日系ボイス』の支援者が、議員会館まで赴いて萱野茂議員にインタビューしています。その時は、いわゆるウタリ新法（アイヌ文化振興法）が成立した直後でした。二風谷ダム裁判で、札幌地裁がはっきりとアイヌを「先住民」と規定していますが、ウタリ新法には「先住民である」という規定がどこにもないのです。つまり、極端に言えば、歌や踊りさえさせておけばよいというわけです。そのための金なら出すということです。これに対して、アイヌの支援者たちは怒っていました。萱野茂議員はとても辛い立場に置かれていたと思います。ダム裁判では一生懸命やって「先住民」であることを判決文に銘記させたにもかかわらず、ウタリ法には「先住民規定」と「土地権の保証」もなかった。彼は、「アイヌが加わってつくった初めての法律であることを認めてほしい」と、辛い抗弁をなされています。

さらに、それから10年、2008年6月、洞爺湖先進国サミットが始まる1カ月前に、駆け込むように国会で「アイヌは先住民である」と決議されました。これまでウタリ新法によってアイヌ文化振興にお金が費やされてきました。それによって北海道では、アイヌに関する芸術、芝居、文化活動がかなり盛んになりました。北海道新聞も熱心にサポートしています。私は、ウタリ新法は一概に無駄ではなかったと考え直すようになりました。「なんで、先住民認定までに10年もかかったのか」という疑問は、当然、ありますが、今やっと、アイヌは先住民として日本社会において、新たな存在として位置づく入り口に立ったのだと思います。

2008年、岡田路明編著『未来—若きアイヌ民族からの伝言』（札幌テレビ放送株式会社）という本が出ました。1985年に出版された『アイヌ、いま』を思い起こすとき、ある種の感慨に浸らざるをえません。『未来—若きアイヌ民族からの伝言』では、「未来」を「同じ人間として」展望したいという主張が展開されています。私も、こうした視点を尊重していきたくと思っています。同じ人間として平等であるということはどういうことなのかを、今後も、カナダに住む日系ジャーナリストとして問い続けていきたいと思っています。